

バラバラになった心を理解するには。

Ralph B. Allison M.D.

Society for the Anthropology of Consciousness

2005 年春の学会にて発表。

4 月 13-17 日 2005 年 マサチューセッツ州アムハースト  
マサチューセッツ大学において。

抄録

1972 年に私は"The Three Faces of Eve" と瓜二つの患者と出会った。しかし、異なっている部分もあった。それは交代人格ばかりではなく、"Inner Self Helper" または"ISH" と呼ばれる存在を私に示してくれたのも彼女だったということだ。彼女の心の健康な部分は、私の多重人格研究におけるいくつかの疑問に答えてくれた。例えば、"それぞれの人間の心は、どのようなコンポーネントから成り立っているのか?" というような疑問だ。私の結論としては、古代ギリシャのプラトンの意見にその答えを見つけることが出来るというものだ。すなわち、人間の心は二つの主要な部分から成り立っているということである。プラトンは"理知的な魂" The rational soul, "不合理な魂" The irrational soul と呼んでいる。私は、今までに数多くのこれら二つの部分が作り出した様々な"他の自己" 達と巡り会ってきた。いくつかは、解離によって作成されたものでありまたいくつかは、感情的想像力によって生成されたものである。此処では、私は、何が誰によって作成され、どうやって見分けるかを述べたいと思う。

\*\*\*\*\*

1972 年、私がカリフォルニア州サンタクルスで開業医をしている頃、最初の MPD の患者に巡り会った。私がこの患者を MPD と診断できたのは (三つの顔を持つ) イヴとそっくりの症状を呈していたからで、私が解離疾患について特別な教育を受けていたからと言うわけではない。当時は、解離に関するいかなる公式な教育システムも存在しなかった。当時、DSM-II によれば、"Personality Trait Disorder, Dissociated (Hysterical), Multiple Personality" ということになる。1974 年になって、私はこの患者に関する"多重人格障害患者に対する

新しい治療アプローチ”と題する最初の論文を発表した。この患者のイヴと もっとも異なっている点は、“Inner self Helper”あるいは“ISH”と呼ばれる 解離した存在で、私はその後数十年に亘ってこの存在を理解しようと試みてきた。 私がまだ開業医でいる内に DSM III が出版され MPD は実在する疾患で、独自の コードナンバーで分類される疾患となった。我々臨床家は皆それを歓迎した。 しかしながら、反動も起こり、1990年代に DSM IV が作成されると MPD は消失し 代わりに解離性同一性障害、Dissociative Identity Disorder, DID に 置き換わってしまった。これは精神科学会の政治的な混乱によるもので、 当時の著名な精神科医、心理学の権威は MPD 等という病気は不可能だと思って いたと言うことだ。理事の一人は私にこういった。”私たちは一人の人間、 一人の人格として生まれてくるのだ。だから多重人格になるなんて不可能 である。”と。彼はただ、こうした患者が存在し、その病気が生成される 過程が存在するということに気づきもしなかったのだ。

古代ギリシャの哲学者、プラトンは総ての人間は、“rational soul”と、 “irrational soul”を持つと信じていた。西洋の哲学者の多くは、 長い間、人間の構成要素として”肉体、心、そして魂”があると 言い続けてきたが、私はその意見に賛成だ。問題は用語にある。私は 只単に“心”という言葉でプラトンの”irrational Soul”に、“魂”を “Rational Soul”に対応させることには同意できない。そこで、この演題の 中では、私は“心”に対して”Personality”という言葉で、魂に対しては ”Essence”という言葉を使用することにする。

DSM IV が刊行されたとき、私は私が MPD と診断してきた総ての患者に DID という診断を当てはめることは間違いだと思ったので、DID という 使わないようにしようと思った。しかし、中にはまさしく DID と 呼ぶべき疾患群が有ることに気づき、私の症例の中でもそれに当てはまる 患者を DID と呼ぶことにした。ここで大事なことは MDP と DID は全く 異なる疾患であるということだ。私は未だに MPD という診断名を 残しておくべきだと信じている。

さて、ここでその二つのグループを臨床的に比較しながら記述して 見ようと思う。最初のグループは正規の解離者達で、真性の 交代人格を作成し、それらは保護的で、サバイバルのメカニズム に則って生成されている。ここで、理解しておかなくてはならない 事は、それぞれの交代人格はコンピュータプログラムの様なもので

**Essence** によってある枠割りを全うするために作成されたものであるということだ。つまり、感情によって自己に都合良く作成されたものとは異なるということである。MPD 患者となるためには以下の要件が満たされていなくてはならない。

1. 素因：Grade V の被催眠感受性を持つ子供で、6 才以下であること。
2. 後天的要素：生命に関わるトラウマ体験、通常は両親の家で 6 才以下に起こる。
3. 持続要素 # 1：偏向した両親。悪い面と良い面と併せ持ち、この役割は時に交代するので、児童の救助が難しい。
4. 持続要素 # 2：偏向した兄弟姉妹。患児だけが虐待されている。

DID に対する要件は以下の通り

1. 素因：人口の平均値よりも上位の催眠感受性。6 才以上。
2. 後天的要素：生命に影響しない程度のトラウマ体験。しかしその出来事に対して対処できるほど成熟していない。典型的な事例としては、レイプなどがあげられる。
3. 持続的要素：だれもこの様なストレスフルな事態に対処する術を教えてくれない、あるいは、見捨てられた環境にある。

MPD シンドロームの生成

1. 最初の解離は、生命に関わるようなトラウマの際にそれまで一つだった"心" が分かれてしまうことである。つまり **Essence** と感情的自己に分かれる。
2. この解離後に、**Essence** は **ISH** としての役割をこなす事になる。つまり、厄災制御士官の役割である。
3. **ISH** は自分が別れた残りである感情的自己を安全な場所へ送る。このため、外界からは存在を感知できなくなる。
4. **ISH** は最初の交代人格を作成して役割を与える。この役割は日常生活を営む為に生成されるもので **False Front** と呼ばれる。  
(安克昌と私は"日常人格" という訳を当てた) この人格は怒りを表現することが出来ない。
5. **False Front** は怒りを取り扱うように出来ていないため、虐待が持続していると、怒りを対処する必要から **ISH** は **Persecutor** 人格を作成する。
6. **Persecutor** 人格が危険をもたらすようになると、**ISH** はこれを防ぐためにヘルパー人格を作成する。

7. このプロセスは持続的に行われる。時間の経過、社会の変化、立場の変化に従って、いくつもの交代人格が作成されることになる。いずれも、サバイバルの為に必要であるという点が大事である。20代ころになると、もっとも年長の **False Front** が **ISH** に勧められて治療に訪れるようになる。いくつもの交代人格が認められるが、オリジナル人格は存在しない。

#### DID シンドロームの生成

1. 最初の解離は早くとも6才以降で、おもなものはレイプや、肉体に対する攻撃である。 **Essence** は解離して居らず、その虐待に対して対処するための交代人格を作成する。つまり、最初の解離は、オリジナル人格と **Essence** の解離ではなく、**Essence** が作成する交代人格である。
2. この交代人格は一人につき、一つの虐待に対処するために作成される。レイプに対処するために作られた交代人格は男に対して過剰に攻撃的となって対処する例が多い。あるいは、売春婦の交代人格を作り、レイプする男を手玉にとると言うような場合もある。
3. オリジナル人格は解離せず、肉体に留まっている。つまり治療者はオリジナル人格と対話できる。
4. 治療にやってくる人格はオリジナル人格である。通常、来院時には一つか二つの交代人格だけが存在する。(虐待の数と種類に依存する)

#### 治療的アプローチ

1. **MPD**: 自殺予防のための入院措置がしばしば必要である。外来に於いては、催眠による **Age Revivification** が最も有効な治療方法である。治療のターゲットになるのは、**Persecutor** 人格だけであり、ポイントは **Persecutor** 人格の怒りのエネルギーを中和することである。この時に強制的に行うのではなく、**Persecutor** 人格がそれに同意する必要がある。他の交代人格には、社会的な活動が必要で、そのためにお互いに人格同士協力する体制が必要である。総ての **Persecutor** 人格が持つ総ての怒りのエネルギーが処理されると、オリジナル人格が肉体に戻ってくることが許される。この時、判断するのは **ISH** である。その際に起こる出来事は **Psychological Integration** と呼ばれるもので、大多数の交代人格はオリジナル人格に統合される。いったん、**Psychological Integration** が起こると、次に患者は、社会的に成熟することが求められる。解離によらなくても物事に対処できるようになると、**ISH** はオリジナル人格と統合することが出来る。この統合を **Spiritual Integration** と呼ぶ。
2. **DID** オリジナル人格の変化が必要である。患者は、成熟した大人の

やり方で物事に対処する術を学ぶ必要がある。これが出来るようになると幼い頃に起こったトラウマに対処できるようになる。その様な教育が DID の治療の根幹を成す。十分に成熟してくれば、交代人格は必要なくなり廃用萎縮していつて消滅することになる。

## 解離と想像

このテーマにはいくつものバリエーションが存在する。もっとも重要なことは、"想像は解離現象ではない" と言うことである。解離という言葉は、この領域に関わる人々によって、なかなか説明できない事態を説明するために好んで用いられてきたきらいがある。だが、解離はサバイバルのメカニズムであることに留意すべきである。交代人格は生存のために必要だから存在しているのだ。ISH はもともとオリジナルの人格が持っている性格構成要素から交代人格を作成する。だから、交代人格はオリジナルの人格に統合されることが可能である。言い換えれば、ジグソーパズルの総てのピースは元々一つの箱の中に有ったものだから、組み立てる事が可能だと言うようなものだ。

ところが、想像は異なる現象である。想像には少なくとも二つのタイプが存在する。インスピレーショナルな想像と、感情的な想像である。インスピレーショナルな想像はしばしば、ISH によって導入される。そしてその想像は偉大な美術的な作品の創造に寄与したり、偉大な発明に寄与したりする。もっとも強力な人間の心の能力、それが想像力なのだ。しかしながら、感情は、感情的想像力を駆使することが出来る。1/3 の大学生は幼児期に **Imaginary Playmate** を生成していたとする報告がある。孤独なときには彼らは想像力を駆使して、素敵な遊び友達を作り出すことが可能なのだ。だが、大人になり、学校へ行き、実際の人間の友達が出来ると、それらは必要なくなり、捨てられる。

ある殺人事件の被告は、4歳の時に母親の間男に押し入れの中に閉じこめられ、その間にその間男が被告の姉をレイプした事があった。その時に、被告は **Internalized Imaginary Companion(IIC)** を作り出したのだった。この IIC は少年の"男"に対する憎しみをエネルギー源としており、そのため、その IIC の存在理由は"男" を殺害する と言うものだった。4歳の時には、実際に殺人衝動が殺人に繋がることはなかったが、20年後になんの罪もない犠牲者を殺害した。このため、この被告は死刑の判決を受けた。

この裁判を通して、最悪の混乱が起こった。被告が"犯行を行ったのは自分ではなく、自分の中にいる他の自分である" と説明したためだ。"やったのは俺じゃない、俺の中にいるジョーがやったんだ" と。この様な

場合、多くの専門家は、この被告が DID で有ると診断してしまう。 諾なるかなかな、DSM IV には解離によって生じる交代人格と、感情的な創造による IIC の生成の違いについて述べている箇所など無いからだ。 実際には、この二つは大きく異なっている。 それは：

1. 交代人格は患者のサバイバルのためにデザインされている。 他人を攻撃したり、罪を犯したりするのは、サバイバルの観点からは望ましいことではない。 米国では粗暴犯は即座に射殺されることすらある。 殺人者には、捕まれば死刑判決さえ下りる。 交代人格は究極的には ISH のコントロール下にある。 ISH が交代人格を作成したのだから。 だが、IIC は誰のコントロールも受けない、ただ、欲望の赴くままに行動するのみである。
2. IIC も交代人格も憎しみの感情を表現する事が可能だ。 IIC は通常社会的な人間としては不可能な欲求を具現化するために生成される。 怒りの交代人格は ISH によって **False Front** が表現できない怒りに対処するために生成される。 この様に、交代人格も個人的に自己を攻撃してくる相手に怒りを向けることが可能である。 だが、IIC は実際に現実的に今自分を脅かしている脅威に対しての怒りと言うより、子供の頃親にしかられた、とか、贈り物が貰えなかったなどの不愉快な事象に凝り固まっていることが多い。 自分の生命に危機が及んでいるということはまず無い。
3. 交代人格が粗野な行動によって MPD 患者の不利益を起し、それが重大だと ISH によって関知されると、その交代人格は再プログラムされて、問題行動が修正される。
4. IIC はどの様な悪さをしてしても無頓着である。 誰にもコントロールを受けない。 それ故、IIC はしばしばとても危険な存在となる。 IIC はまるで軍隊で使用される、スマート爆弾のようなものだ。 いったん、爆弾がセットされると、ただ目標を破壊する、という非常にシンプルなメカニズムのため、修正不能である。
5. 交代人格は、怒りのエネルギーを放出することで変容することが出来る。 **Persecutor** 人格はもともと、**Helper** 人格となるべきものである。 怒りを除けば、**Helper** となって患者のサバイバルに最大に寄与することになる。
6. IIC が怒りのエネルギーを失うと、消去される。 IIC はただ、“怒り” や “憎しみ” そのものなのである。 まともな構造さえない。
7. 交代人格は患者の背景に拘泥しており、催眠によって容易に呼び出すことが可能である。 また、患者の意志によって消去したりすることは出来ない。
8. IIC は患者自身の意志によって消去可能である。 これは患者の損得勘定によってしばしば、自動的に起こることが観察される。 裁判の時に見られる IIC も死刑判決が下りてしまうと、必要が無くなるので消去されてしまう。 こうなると催眠下でも呼び出すことは不可能だ。

サマリー：

MPD と DID はともにもともと二つの全く異なる疾患群を示すべき用語である。  
MPD と DID はどちらも交代人格を生成する。しかしながら、解離ではなく感情的な想像力によって生成された IIC を交代人格と混同すべきではない。  
IIC が、体を則り交代人格のように"存在" として体を動かし得るとしても。

三條典男

-----

医療法人 三條医院

産婦人科、小児科、内科、心療内科

山形県新庄市